

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03173

研究課題名（和文）互酬性と民主制 前4世紀アテナイにおける公私関係の変容

研究課題名（英文）Democracy and Reciprocity: between Public and Private in 4th century Athens

研究代表者

栗原 麻子（KURIHARA, Asako）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：00289125

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：アテナイでは、前6世紀以降、民主制の浸透と並行して、公私の峻別と男女の領域の分離が進展した。本研究では、公的弁論と民意形成の場である法廷弁論で表明される互酬性と友愛の論理に注目し、女性にとっての市民権の意義、公共圏を支える情報とポリスの関係、家族・ジェンダー・市民統合といった諸問題が法廷でどのように表明されていたのか、公的弁論形成の場としての法廷で、公私領域の区分がどのように説得に用いられていたのかを分析し、アテナイにおける日常的な人的構造が、いかに「互酬性のレトリック」のもとに統合されていたのか、公私の関係性のメカニズムを浮き上がらせることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古典期アテナイ民主制を互酬的な価値観が支えていたことを、法廷という現実の闘争の場で表明された弁論に基づき示すことによって、公私の峻別にもとづく現代とは異なる論理で、近年注目されている顕彰碑文等の社会慣行にたいする理解を助けることができる。

研究成果の概要（英文）：Athens after the 6th century BCE, witnessed the division between public and private spheres, concomitant with the segregation of gender roles into 'manly' and 'womanly' domains. This research elucidates the significance of female citizenship, the role of information and rumor in shaping public opinion. By shedding light on how day-to-day interactions and social structures of Athenian life were reinforced through principles of reciprocity and friendship, particularly regarding matters such as family, gender, and civic unity.

研究分野：西洋史学

キーワード：ギリシア 互酬 民衆法廷 アテナイ ジェンダー 市民権

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、前4世紀アテナイにおける市民権に関する研究は、市民意識や共同体意識、さらには非市民や女性とポリスの関係を問い直す方向に展開し、公的領域と私的領域の関係性が問題視されるようになる。そのなかで研究代表者は、法廷弁論における互酬性と友愛の論理に注目し、法廷を個人的利害の応酬の場とみる先行説にたいして、むしろそのなかで共同体的なるものが形成される論理を重視する立場から、市民的紐帯を支える公共性のありかたについての検討を重ねてきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、民主制下アテナイ、とりわけ前4世紀の公共性のなりたちを捉えることにあつた。前6世紀以降アテナイでは、民主制の浸透と並行して、公私の峻別と男女の領域の分離が進展したといわれてきた。しかしそのいっぽうで、アテナイは公私のさまざまなコミュニティの連なりによって構成され、互酬的な価値観が浸透した社会でもあつた。ペロポネソス戦争からカイロネイア戦争後のヘレニズムへと向かう前4世紀の変化のなかで、アテナイにおける公共性が公的言論の場でどのように関連づけられていったのかをとらえる必要があつた。

3. 研究の方法

(1) 法廷弁論の分析

市民意識を探るための主資料は、法廷弁論である。前5世紀末から前4世紀末のあいだに執筆された法廷弁論は、パブリックに共有されていた価値観を写す鏡である。そのうち、とりわけ以下の弁論を中心に分析を加えた。

(i) 伝デモステネス『ネアイラ弾劾』

同弁論は、非市民女性の市民権を弾劾対象とすることから、女性市民権について探り、市民社会のあり方と、市民性を考えるための唯一無二の資料である。遊女ネアイラとその娘ファノ、事実上の夫ステファノスの市民権詐称を問題視する同弁論の分析を通じて、女性にとっての市民性を考察した。

(ii) リュクルゴス『レオクラテス弾劾』およびヒュペレイデス『リュコルフォン弾劾』

カイロネイア戦争敗北後の復興期におこなわれた2つの弾劾裁判を通じて、政治家ではない一般市民に求められた公共性とコイノン(公的領域)の広がりについて考察した。

(iii) デモステネス『ボイオトス弾劾I、II』ほか

近年の感情史への関心と、古代史研究を接続するとともに、法廷という感情共同体におけるジェンダー構造を分析した。

(2) 記録・記憶の共有に関する研究

(i) ケオスにおける内乱後の法碑文の破壊と再刻の事例について分析することにより、アテナイにおける公的記録・記憶の形成について、法を石に刻むことの意味について考察した。

(ii) 裁判手続きにおける情報の正確さの確保について、証人による証言がどのように担われていたのかを検討した。

4. 研究成果

前4世紀アテナイの公私関係を、女性にとっての市民権、アテナイの法秩序と互酬性、情報とコミュニケーションの3点から考察した。

(1) 女性にとっての市民権や公共性の意味を考察する論稿「遊女ネアイラと市民権」を、『歴史と地理』上に、公刊した。また『ネアイラ弾劾』の邦訳に詳細な注釈を施し、刊行した。女性市民をめぐる考察としては、ほかに岩波講座『世界歴史』で、女性とポリス関係について論じたことを成果として挙げておきたい。なおこの問題についての入門書の準備を進めた。また、女性市民権研究の第一人者であるブロック教授の来日時にワークショップ Citizenship and Participation in Classical Athens(令和4年11月)を開催し、ブロック教授の基調講演に対して、女性市民権、宗教、男性の市民性、外国人や商業従事者といった市民権をめぐる問題に取り組んできた我が国の研究者によるコメントと個別報告を行った。先述のデモステネス59番弁論について検討する際に、女性市民(ポリティス)の語を巡って新たな視点を提出した。

(2) アテナイの法秩序と互酬性に関するこれまでの研究をまとめ、『民主制と互酬性-アテナイ民衆法廷における「友愛」と「敵意」』(京都大学学術出版会、2020)を刊行した。

(i) 前5世紀末以降の法廷における家族・ジェンダー・紛争解決・市民統合といった諸問題が、法廷でどのように表明されていたのか、また公的弁論形成の場としての法廷で、公私領域の区分が、どのように説得に用いられていたのかについて見取り図を示し、アテナイにおける日常的な人的構造が、公的な言論の場である民衆法廷で、どのように「互酬性のレトリック」のもとに統合されていたのか、公私の関係性のメカニズムを浮き上がらせることができた。

(ii) リュクルゴス時代についての検討を通じて、ヘレニズムにつうじる新たな兆候が、大きく

はそれ以前からの社会構造の枠組の連続性のもとに理解しうることを、法廷での言説を通じて示すことができた。

(3) 西洋史においては感情史およびエゴドキュメントが突如注目を集めている。上記の研究は、これと密接に関連するため、論文集『生き方と感情の歴史学』(南川高志・井上文則編、山川出版社、2020年)において、感情史研究との橋渡しを行なった。後者においては、全体の議論に貢献したほか、個別論稿として「恋情(エロス)」と「説得(ペイトー)」の関係性を検討した。法廷弁論に描かれる男女関係において、「恋情(エロス)」は、婚姻外の関係性を示唆するものとして扱われ、夫と妻のあいだには求められていなかったことを示し、さらにメナンドロスの新喜劇や悲劇作品にも考察対象を広げることによって示すことができた。また感情史研究との接点を得たことにより、個人的なことを公的に表明するという法廷弁論の特質を明確化した。

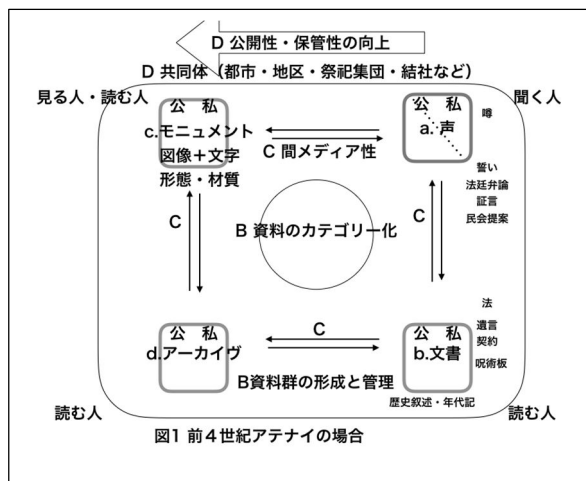
(4) リュクルゴス時代の公私関係について得られた構図を、ヘレニズム以降の展開に結びつけ、法廷における言説とこの時代に顕著になる立碑行為を理解するために、情報伝達をめぐる規範と実践について検討した。この課題に関して、研究代表者自身が前403年の民主制の回復時のアテナイおよび、前4世紀におけるキオス島のスタシス(内紛)における法の破壊についての研究報告、法廷弁論における定型表現の利用(「富国強兵」についての明治日本と前4世紀アテナイの比較研究)および、民衆法廷における噂と伝聞証言についての研究を行うとともに、共同研究を立ち上げた。

(i) 法の有効性と碑文との関係性についてはすでに国際学会で原初性のある研究発表をおこなっていたが、新たに国内の研究者および市民にたいして研究内容を報告することができた。

(ii) 「証言」と根拠についての国際学会(ギリシア共和国、カラマタ)で、伝聞証言について報告した。これまでアテナイ法廷では、「伝聞証言」が否定的に扱われていたと考えられてきたが、ヘロドトスによる、調査における伝聞による二次的証拠についての見解を参照して、弁論におけるすべての事例を再検討することによって、アテナイ法廷においても、ヘロドトス等と変わりなく、伝聞証言は、二次的な情報源として重用されていたこと、ただし情報の根拠を明確化し発言の責任を取ることが、証言者に要求されていたことが導かれた。また、法廷での説得においては、厳格な情報源の明示義務と、証言者の責任が要求されるいっぽうで、「民の声」としての「噂」が説得力を持ち得たことから、法廷における「民の声」の利用という新たな研究課題が得られた。なお報告内容は、国際共著としてブリルから公刊された。

(iii) アテナイ社会における情報伝達の制約と、そのなかでの「噂」の働きについての検討を開始した。査読誌である『古代文化』の特輯「ギリシア史研究の新潮流(2)コミュニケーションと社会統合」を組み、代表者自身の「噂」についての検討結果を、そのなかの一論稿として公刊した。「噂」と「情報」についての研究は、「噂」についての神話的研究、文学的研究を除けば、ほぼ手付かずの状況にあるため、引き続きの次なる課題として継続中である。また「戦争におけるレトリック」に関する国際共同研究に参加し、トゥキュディデスの「シケリア遠征」叙述における情報伝達と噂の利用について研究報告をおこなった。

(5) 比較のために「メディアとコミュニケーション」研究会を開催した。この研究会は、「前近代ヨーロッパにおけるメディアとコミュニケーション研究会」へと拡大し、近現代に特化した形で検討されてきたメディア研究と前近代社会をつなぐ新たな研究視点のもとに年4回の研究会を開催した。関西および名古屋の若手院生・PDを中心としたメンバーとともに、アテナイはもとより、ポイオティア連邦、プトレマイオス朝期のエジプト、ローマ支配下の小アジア、共和政期ローマにおける情報伝達等にかんする報告を受けて、石刻資料、書簡、弁論、それらが公開される都市空間の関係性を踏まえた議論をおこなった。とりわけ、書簡という、閉じられた伝達形式による文書が、他都市に伝達され、しかも公開される文書の変容と受容について、比較を行った。また、記録の保管と政治シドの関係性、都市の法文書の管理、広場の形成といったトピックについて中世史研究者も交えて議論を重ね、都市の政治・社会空間と情報伝達の手法の密接な関連性について比較するための準備を進めた(図参照)。さらには、媒体を移動するテキストを扱うことによって、公私の交錯するメディアのありかたを比較するための基盤を形成することができた。



(6) 研究会の成果の一部を、日本西洋史学会小シンポジウムで公開した。間メディア性に着目することで、演説と都市のトポグラフィ、書簡の公開、冠授与といった個別のトピックに基づいて、情報の公開性・公共性の問題を検討するための新たな視点を提供した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 75.3
2. 論文標題 (解題) 古代ギリシア研究の現在地 (2) に寄せて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 75.3
2. 論文標題 古典期ギリシアにおける噂・情報・コミュニケーション	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 71
2. 論文標題 Konstantinos Kapparis, Women in the Law Courts of Classical Athens. Edinburgh: Edinburgh University Press. 2021. 85.00 Pound. ISBN 9781474446723	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 109-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 75
2. 論文標題 (書評) 「apairesis考ー前4世紀アテネにおける離婚と市民団 (佐藤晃太) 」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法制史研究	6. 最初と最後の頁 514-519
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 巻号なし
2. 論文標題 文字そのものの力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 角谷常子編『東アジアの文字文化』	6. 最初と最後の頁 197 - 205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 67
2. 論文標題 (書評) Joseph Blok, Citizenship in Classical Athens	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 125 - 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 252
2. 論文標題 遊女ネアイラとアテナイ市民権	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 世界史の探求 (歴史と地理)	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原麻子	4. 巻 17
2. 論文標題 アテナイにおけるト占・解説	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西洋古代史研究	6. 最初と最後の頁 14 - 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ロバート・パーカー（栗原麻子訳）	4. 巻 17
2. 論文標題 アテナイにおけるト占	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西洋古代史研究	6. 最初と最後の頁 1 - 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Asako Kurihara
2. 発表標題 Romour and Politics in War in Athens
3. 学会等名 COR/ISHR Rhetorical Get Togethers 3.0 “Rhetorical representations of war and atrocities in deliberative and forensic oratory and in speeches in Graeco-Roman historiography”
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Asako Kurihara
2. 発表標題 Female citizenship: the case of Apollodorus’ Against Neaira
3. 学会等名 (Workshop) Citizenship and Civic Participation in Classical Athens (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栗原麻子
2. 発表標題 「古代地中海世界におけるメディア・コミュニケーション・間テキスト性」
3. 学会等名 ;第70回日本西洋史学会古代史小シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗原麻子
2. 発表標題 「ギリシア演劇および法廷弁論における感情理論と観客(コメント)」
3. 学会等名 2020年度 第7回FINDAS研究会「ラサ論」(共同利用・共同研究課題「南アジアの社会変動・運動における情動的契機」2020年度第3回研究会と共催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栗原麻子
2. 発表標題 アテナイ法廷における伝聞証拠(アコエー) うわさと証言を中心に
3. 学会等名 広島大学史学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗原麻子
2. 発表標題 書かれた法の「有効性」をめぐって
3. 学会等名 ギリシア文化研究所(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Asako Kurihara
2. 発表標題 Hearsay Witness and Rumour in the Athenian Lawcourts
3. 学会等名 The 2nd International Conference of Drama and Oratory(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 近藤次郎、橋場弦、栗原麻子ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 342
3. 書名 古代西アジアとギリシア ~前1世紀(担当:ジェンダーからみたアテナイ民主政)	

1. 著者名 デモステネス、栗原 麻子、吉武 純夫、木曾 明子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 464
3. 書名 デモステネス弁論集7	

1. 著者名 Andreas MAKANTONATO, Vasileios LIOTSAKIS, Andreas SERAFIM, Asako KURIHARA et al.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gryter	5. 総ページ数 306
3. 書名 Witnesses and Evidence in Ancient Greek Literature(担当: Rumour and Hearsay Evidence in the Athenian Law-courts)	

1. 著者名 南川高志・井上文則編著、栗原麻子他著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 400
3. 書名 生き方と感情の歴史学 : 古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて	

1. 著者名 高田京比子, 三成美保, 長志珠絵編、栗原麻子ほか著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 神戸大学出版会	5. 総ページ数 344
3. 書名 <母>を問う 母の比較文化史	

1. 著者名 栗原 麻子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 654
3. 書名 互酬性と古代民主制	

1. 著者名 南川 高志、井上 文則編著、栗原麻子ほか著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 400
3. 書名 生き方と感情の歴史学	

1. 著者名 栗原麻子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 633
3. 書名 互酬性と古代民主制	

1. 著者名 金澤周作	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 321
3. 書名 論点・西洋史学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 (Workshop) Citizenship and Participation in Classical Athens	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 In and Out of the Written Materials: A Workshop	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------